

特集 ● 占領と開拓の〈記憶〉

# 故郷喪失の季節

満洲郷土化運動と金丸精哉〈満洲歳時記〉の錯時性

小泉京美

## 一 遼東の詩情<sup>ホシイ</sup>

南満洲鉄道株式会社（以下満鉄）社員会の機関誌『協和』に、「郷土色」のコーナーが設けられたのは一九二九年五月のことだ。同欄には「満洲」（現・中国東北部）の四季に即した風俗文化を題材とするエッセイが掲載された。連載第二回目となる五月一五日号の編集後記に次のように趣旨が表明されている。「郷土色」は単なる支那風俗研究に止まるものではない。まず、常識として心得置くべきもの、興味豊かなもの等のほかに、此地に住むものが、此地を郷土として、びつたりと板についた生活になすべく、故郷としての此地の物象を親しみをこめた眼で眺め、しつくりと考へて見たいといふ所に此の欄の本質的な立場があるのです。もちろん、「此地の物象」を取り上げる彼らのまなざしは、大半の社員の生活の拠点であった「満鉄王国の

首都」（与謝野寛・晶子『満蒙遊記』大阪屋号書店、一九三〇年）、大連を起点としている。社員とその家族の定着・定住を課題としていた満鉄社員会に、地域に密着した文化を促進する動きが起こったのは自然なことであつただろう。

一九一五年に「南満洲及び東部内蒙古に関する条約」が締結され、関東州と附属地の租借期限の延長が実現すると、満鉄は「附属地小学校児童訓練要目」を制定し、「国体ノ尊厳」「国民道德」の会得に加えて、「帝国ノ地位ヲ了解セシメ土地ト相親シムノ念ヲ養ヒ質素ニ安ジ勤勞ヲ樂マシムベシ」と、満洲に定住し、開拓・発展に寄与する人材の育成を目標に掲げた。一九一九年に附属地の日本人教育施設を視察した学務課長保々隆は、次のとおり訓示を行っている。「殖民は民を植ゑること、即ち附属地を埒として経済的發展をなさしめ、過剰人口を調和するにある。然らば人を殖やすには如何なる方法を取るべきかといふに、此の地にあるものを去らせないやうに為すこ

と(中略)此の方法として、例へば奉天の小学校の児童には東京の次に好い処は奉天であると謂ふことを思はしめる必要がある。児童の親は「内地恋しや」の人々であるから、一層力を入れて、此の土地に親しむやう教育せられたい」(訓示要領)『滿鉄附屬地経営沿革全史』南滿洲鐵道、一九三九年。滿洲在住日本人の定住を促進すべく、次世代教育が重視され、「内地延長主義」から「適地主義」への転換が図られていた。

「郷土色」の二回目が連載された『協和』(一九二九年五月一日)には、雑誌『滿洲短歌』の創刊が告知されている。『滿洲短歌』は「滿洲郷土芸術の将来を明るくするといふ目標」を掲げて同年発足した滿洲郷土芸術協会の機関誌である。同会を結成した歌人の八木沼丈夫を筆頭に、『協和』の編集部が中心となつて創刊された。<sup>(1)</sup>創刊同人の城所英一は「滿洲短歌」の立場(『滿洲短歌』一九三二年五月)で次のように述べている。

地方雑誌の立場として我々が亘に考へてゐることは、内地歌壇の徒らな延長に終らしめ度くないこと——滿洲の土の匂ひ——を作品に浸透させ度いこと。

遠く母国を距てた海外に住む我々の精神を姿を、しっかりと把握して、彫心鏤骨しんじつに歌ひあげ度いこと。我々の郷土としておそらくは骨を埋めるであらう此の地に、我々の郷土芸術を樹立すべき責任をさへ感じてゐること。

城所英一の言には、多くの日本人が「骨を埋めるであらう」同様に、「郷土芸術を樹立する責任」という社会的な責務観だけではなく、「母国を遠く離れた、伝統圏外の不羈奔放な新天地に住む我々である。我々の立場こそ、何か新しいものを創造する良き條件を盡く備へたるが如く見える」という、文学的野心が滲んでいる。そもそも、城所は大連で発刊され、「内地」の詩壇にも大きな影響を与えた短詩運動の詩誌『亞』(一九二四年創刊)の創刊同人だった。『亞』は一九二七年一二月に終刊し、安西冬衛や北川冬彦ら主要な同人は、「内地」の『詩と詩論』(一九二八年創刊)に参加していた。城所の「我々は内地歌壇の不断の喧騒を傍聴してゐる。——その離合集散を遙かに傍観してゐる。その圏外に在つてそれらを静かに批判し得る事を幸福だと思つてゐる」という、いささか冷笑的な態度は、「内地歌壇」(詩壇)への対抗心のあらわれであつたのかもしれない。<sup>(2)</sup>

「内地」に対抗して「此地独自の郷土色」を創作に反映させようとする動きは、大連の文学状況において共有されていた。『亞』の強い影響下で、一九二九年に創刊された詩誌『戎克』は、「遼東のポエジー」(小杉茂樹「断片言」『戎克』一九二九年三月)を、翌年創刊された『燕人街』(一九三〇年創刊)は「滿洲の詩野」(冬樹伸一「模倣詩」『燕人街』一九三〇年三月)の広さを主張した。それぞれ、詩風・歌風や主義・主張を異にしていたとはいへ、同じように『亞』以降の大連の文学状況を、地域の独自性を強調

することでも乗り越えようとしていた。<sup>(3)</sup>「我々の時代、と云つても先輩の開拓した土地を耕してゐる様ではだめだ。我々はおつともつと、新領土の創見に努力すべきだ」(城小確「領土片」『戎克』一九二九年八月)と奮起する彼らは、「新天地」という地政学的な前衛性に、詩や短歌における「新領土の創見」という文学的な前衛性の条件を見出そうとした。「郷土色」への関心は、満洲事変後には政治的な目的意識に支えられることになる。

今や満洲の情勢は明るく転向し、母国の生命線たる意識は一入判然として来たのである。従来 of 所謂出稼人根性を完全に揚棄し、此処に定住する気持ちをしつかりと持ち直すことによつて、新たに特殊な感情が甦つて来るであらうし、特色のある歌が来ると信ずるのである。

つまり、土に即し大地に腰を据えることである。新しい郷土の観念を更めて樹立することである。

城所英一「地方色といふもの」『満洲短歌』一九三二年七月)では、満洲を「母国の生命線」として位置づける地政学的思考が明確化されている。中央と地方、「内地」と「外地」を差異化し、「植民地在在の我等の精神」を「郷土色」として發揮するという営みは、満洲を日本の「地方」として「新しい郷土」に再構成し、「母国」に対して「植民地」の役割を果たすという植民地主義的な目的意識に尖鋭化していった。それが大陸侵略の拠点として、

満鉄が本社を構えた租借地、大連の「<sup>ワカライ</sup>地方色」だった。

一九三二年三月一日、「満洲国建国宣言」がなされると、満鉄社員会は「満洲郷土化運動」に乗り出した。一九三三年九月一日発行の『協和』の巻頭言「満洲を『住みよきところ』には、『王道楽土』とは『住みよいところ』を意味するであらう」と述べ、満洲郷土化運動を提唱する。<sup>(4)</sup>

満洲が、日露戦役以来、日本人に開かれて、既に三十年の月日は流れた。(中略) 附属地の文化は日本の都市はおろか、欧米の田舎都市等は到底及ばぬ程、立派な施設に栄えた。但し附属地の外一步を出づるや、そこには何等邦人の足溜りになすべき所は見出されぬ。

三十年間僅に猫額大の州内と附属地の物質的施設にのみ終始した事は、何と言つても残念である。是に対してはいろ／＼な申訳はあるだらう。だが、諸々の障害を碎破して、斯の地を楽土とすべく一歩でも前進せしむる自発的勇猛心の不足して居た責任は、在満同胞の凡てが負うべきであらう。

しかし、満鉄の「附属地の外」へ拡張して「王道楽土」の実現を目指す満洲郷土化運動は、境界線の移動と同時に新たな分岐を内部に抱えることにもなった。『協和』の「郷土色」のコーナーは、同年八月一日に「新京の地方色」を掲載し、以降

は各地の「地方色」の連載に変わった。「母国」の「新しい郷土」として日本に編成されたはずの満鉄沿線各地の「郷土色」は、しかし「国都」に定められた「新京」（現・長春）を起点とする「満洲国」の「地方色」でもなければならなくなったのである。

## 二 大連と新京

まず、関東州や満鉄の附属地において、在住日本人の故郷・郷土意識を高め、「母国の生命線」としての役割を果たす人材の育成や、そのための日本人の定住を目指す運動があった。そして「建国宣言」（一九三二年）がなされた後の「満洲国」で、日本とは異なる文化を創造する動きが起こる。しかし、この二つの運動を同時に進めることは、「満洲国」を独立国家とみなす以上は矛盾するだろう。

大谷健夫は「千九百三十一年の満洲事変は、日本と満洲の結びつきを緊密にし、続いて昨年の支那事変以来、更に支那本土とも結びつき、その三つを一九にした「新しい日本」が誕生しやうとしてゐる」（『小説界概観』『満洲文芸年鑑』第二輯、満蒙評論社、一九三八年）と歴史認識を示した。この歴史認識に呼応するように、満鉄の郷土化運動は、「満洲国建国」後にそれまでの永住促進の潮流を引き継ぐかたちで高揚し、一九三七年にいよいよ本格化した。<sup>5)</sup>

だが、大谷健夫が一方で「満洲国は日本の一地方ではない。

風土や政治経済的環境は、日本内地とは全く異なっている。ここに日本の一地方文学ではない「満洲文学」と云ふ特殊な存在が要求せらるゝのである」とも述べたように、「満洲国建国」は、それまでの事態とは決定的に異なっていた。満洲事変が「母国の生命線」として、満洲を包含する「新しい日本」の再編成を意識させたとするならば、「満洲国建国」はそうした植民地意識を揚棄し、「日本の一地方」ではない「満洲国」に独自の新文化を建設する機運を巻き起こした。満洲の日本人社会で高揚した二様の国家主義は、「満洲国建国」を分水嶺に、鋭いイデオロギーの対立を惹き起こさずにはおかなかったのである。

こうした「満洲文学」をめぐる葛藤や矛盾は、しばしば都市のアナロジーで語られた。「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」という概念は、「満洲国」の首都建設計画の進展に伴って、文化の中心が大連から新京へ移動する過程で生じた文芸思潮の対立として指摘されてきた。日本浪漫派の作家、北村謙次郎は次のように回想している（『北辺慕情記』大学書房、一九六〇年）。

その頃の満洲国官吏というと、よく飲みよく遊びもしたようだが、協和服を着込んで建国精神や協和理念を説くあたり、颯爽たる気概にむしろ筆者などアテられ気味で、渡満当初はひどく当惑したことを思いだす。（中略）そこでこの「風」を新京イデオロギーと尊称し、満鉄マンあたりによつて代表される自由主義的な大連イデオロギーなる

ものが、はつきりこれと対立することになった。もともと関東州や満鉄附属地に住み、長年に亘りこつこつ一家をなしたという連中は、大正時代の思潮を背景とすると同時に、自由港大連の影響もあつて、考え方が小市民的、自由主義的なのは当然である。これを大きく支えるのが、満鉄という大温室であつた。

当初から内実が不明瞭だと批判（大連生「大連イデオロギーと満洲文学」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年四月二日）されるほど印象的な差異でしかなかったものが、なぜ、とりわけ「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」として強調されたのか。日露戦争後に日本が租借し、都市建設や行政事業の大部分を満鉄が担った大連と、「満洲国」の首都として、国都建設局が主導する「国都建設計画」が推進された新京という都市の成り立ち、それぞれいかなる文芸思潮を表象していたのだろうか。

「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」の対立を、批評の場に持ち込んだと目される評論家の西村真一郎は、「在満作家に当然起るべき問題」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年四月一〇日）において、「満洲文学」を「日滿不可分の精神に基づく日本民族の指導、強化であり、満洲工作の線に沿ふ文学活動である」と規定した上で次のように述べる。

然しながら現在の過程にあつては、茲に当然起つて来る

問題がある。それは関東州内に於ける作家と満洲国内に住する作家の問題である。このことは一般的には新京イデオロギー及び大連イデオロギーに依つて代表されるものであつて、両者の環境上の相違に依つて決定づけられた相克である。然し大連イデオロギーは日本内地及び満洲国との間に生れた私生児乃至は庶子のやうなものであつて、早晩いづれかに従属しなければならぬが、満洲国の健全なる躍進を擁護し指導するといふ我が国大局の見地に立脚するとき、大連イデオロギーは当然新京イデオロギーに解消する必然性があるのだ。

西村真一郎は「満洲文学」における「新京イデオロギー」の「指導性」を主張した上で、大連の作家に「満洲工作に対して作家としての熱情が見受けられない」と指摘し、その理由を「満洲事変の温床地である大連が、建国と共に満洲工作に対する熱情が失せてしまったからだ」と述べる。一九三七年に「満洲国」における日本の治外法権撤廃及び満鉄附属地行政権の移譲が実現し、満洲全域が「満洲国」の名の下に一元的に支配されることになった。しかし、大連を含む関東州は「満洲国」から租借権を与えられる形式に変更されてはいたものの、「満洲国」の一部でありながら統治権益は日本にあり、日本の統治下にありながら日本の領土ではない、租借地という曖昧な形態のままであつた。

それまで日本の大陸支配の最前線だった関東州は、両義的で境界的な場所とみなされ、「日本内地及び満洲国との間に生れた私生児乃至は庶子」として、「満洲国の健全なる躍進」の前に「解消」されようとしていた。「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」の対立は、人脈や居住地の分布に基因する雰囲気の違いなどという曖昧なものではなく、文学理念上の鋭いイデオロギーの対立として、「満洲国建国」後の地政学的文脈において生起していた。

だが、西村真一郎が「満洲文学」の成立に「我が国対局の見地に立脚」した「日本民族の指導」性を疑わなかったように、「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」という分断は、排除と包摂の論理を内包する政治的な身振りでもあった。このことは、満洲事変以前に高揚していた故郷・郷土意識の高まりが、租借地から独立国家へとという統治形態の移行によって生じる論理的矛盾を解消しないまま、「満洲国建国」後の満洲郷土化運動へ接続したことに関わっている。

大連在住の小説家、吉野治夫は「満洲文学の現状」『セルパン』一九三九年四月）で次のように述べる。

満洲に発芽してゐる文学が一つの運動となつてゐるとすれば、（中略）その特色は、一、満洲に於いて独自の主題を発見しようとする、二、日本文壇依存心を排棄すること、三、満洲独自の文学形式を発見しようとする

ことに雪崩れのごとく行進してゐることであらう。右は事変後、殊に昭和八、九年頃より強調され、年々共鳴を集め、今では容易に動かし難い信念に近いものにまでなつてゐると見て間違ひない。その理由としては三十数年来、満洲がほとんど日本から無視されてゐたことに對する反撥と、満洲建国後の新情勢に依つて自覺した新文化建設に對する責務観と、日本文壇の行詰りに對する憚らなさが挙げられ、これらが支那事変により更に確信にまで飛躍したものと見る事ができる。

吉野治夫に従えば、「日本文壇依存心を排棄」して、満洲に「独自の主題」「独自の文学形式」＝「満洲文学」を求める動きは、満洲事変を契機に高揚し、日中開戦の一九三七年に最高潮に達したことになる。そこでは「満洲国建国」によって生じた政治的・文学的葛藤は、満洲と日本（内地）を差異化する文脈の中に埋没している。先にみたとおり、こうした操作は満鉄の満洲郷土化運動においてもみられた。

大連在住の詩人で、かつては『亞』以降の詩に「遼東のポエジ」を發展せしめよう（小杉茂樹「断片言」）とした『戎克』の同人だった城小確は、「満洲国建国」によって生じた葛藤を「祖国愛」と「郷土愛」の問題としてとらえた（『満洲文学の精神』『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年五月二日、四日、五日）。

我々の墳墓の地となるべき、我々の子孫に残して行くべきこの満洲国をよりよき理想郷を建設しなければならぬのである。郷土愛、つまり郷土愛そのものが五族を同一方向に転ずる唯一の道である。

茲に於て問題にされるべきものは祖国愛である。当然現在の満洲国の国家を形成する。しかも一つの大きな民族の帰趨である。祖国愛か、郷土愛か。文学の場合に於てもこの問題の動向によつて満洲文学の方針が分岐されるのである。

祖国愛か、郷土愛か。郷土愛か、祖国愛か。

城小確は「私の現在では、郷土愛より、この祖国愛の方が大きいのだ」と述べつつ、「祖国愛を犠牲にしてこそ満洲国を愛し満洲文学を世界文学の水準に引上げる過程ではなからうか」と植民地意識の超克を示唆した。「郷土愛」と「祖国愛」の分岐が問題視されつつも、しかし一方を断念しなければならぬという志向は、西村真一郎が「大連イデオロギー」を淘汰されるべきものとしたことと重なり合うだろう。そしてここでも、自覚された分岐は直ちに覆い隠されてしまう。城に応答した角田時雄「満洲文学に就て——城小確氏の論を読んで——」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年五月一四日（一六日）は、「真に祖国日本の建国精神と、満洲帝国の建国精神を体感せらるゝならば、祖国愛と郷土愛とを分岐点におくのは矛盾ではなからうか。い

ふまでもなく郷土として満洲を愛することは、祖国愛に出発し、祖国愛に徹底することであらねばならぬ」と述べた。

これらの経緯が示しているのは、日本と「満洲国」の地政学的葛藤が、一連の歴史的發展として文脈化されることで覆い隠される軌跡に他ならないだろう。満洲を日本の一地方としてとらえ、「母国の生命線」としての役割を期待する植民地主義的な言説と、「満洲国」を日本から自立した独自の国家としてとらえ、脱植民地化を強調する言説は、日本と「満洲国」の境界線をときに無効化し、ときに強調する二重基準として、互いを補完しつつ機能した。「郷土」「故郷」「祖国」という言葉の観念性が、その二重性を覆い隠す煙幕となったのである。

### 三 故郷喪失の季節

ここでふたたび「大連イデオロギー」に目を向けなければならない。大連の曖昧な都市の成り立ちとともに二重性を被りながら、しかもそれゆえに過渡的な状況として表象され、解消されようとしたことがらは、満洲在住日本人二世の「故郷喪失」の問題として浮上する。

「祖国愛」と「郷土愛」の相剋を、満洲在住日本人二世の喪失感として吐露し、満洲の文学状況に波紋を投げかけたのは、大連で発刊されていた文芸誌に発表された秋原勝二の小説「夜の話」『作文』一九三七年七月）だった。秋原は次のように述べ

る（「故郷喪失」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年七月二十九日（三一））。

考へてみると私は、現実を血肉化する手段すらあたへられなかった。内地のまゝの言葉をつかつて、日本のまゝのおべゝを着て、内地の風物で教育され、二十有数年、内地、内地と日本人の心は満洲でから廻りをつづけてゐた。これは確に過去の在満日人の姿である。

満洲日本人の精神所得は、さうして過去において全然無に等しいものとなつた。語るべき何も持つてはゐないのだ（中略）。

故郷喪失——そんな言葉すら何か遠い感じ。喪失といつてしまつては、既に失ふ何かがあつたことになるが、ほんとは、それすらなかつたやうだ。

秋原勝二が示した満洲在住日本人二世の位置を、より辛辣な批判とともに浮き彫りにしたのは江原鉄平「満洲文学と満洲生れのこと」（『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年八月一八日（二二））である。江原は「満洲生れの故郷喪失は、つまり殖民倫理への猜疑から出る。自分の生地を思想的疑惑によつて失つた者の一種の虚無感である」と述べた。

われ／＼が小学校の頃から教へられたのは「お前達の国は海に向ふにあつて此処は植民地である。お前達は植民地へ

来て生れたのだが母国を忘れてはならぬ。海に向ふのが国は山紫水明の国、緑深く、花咲き、鳥歌ふ夢の如く美しい国」それから幾多のそれに関する知識である。（中略）

つまり、私は、他家に育つた継子が母を持つてゐないやうに、満洲にも内地にも愛着を持つてゐない（一）

私には故郷がない。さうして故郷ならぬ養家へ帰つて見れば、そこでは養家の文学といふものが提唱されてゐたのである。私は継子の文学ではないのかと疑つた。

江原鉄平にとつて「満洲文学」とは「われ等の父母が如何にして大連、奉天、長春（新京）を築いて行つたか、満洲事変前後の経緯、その他日本人中心の勢力扶植史を書く」という「植民文学」か、日本人開拓移民が入植した「佳木斯辺の移民地」に「第二の東京」を築く「帝国主義文学」としてしか成立しない<sup>(8)</sup>。

一九三七年、広田弘毅内閣が「二十カ年百万戸送出計画」を策定し、開拓移民事業は飛躍的に拡大した。一九三九年には大陸開拓文芸懇話会が発足している。いわゆる「開拓文学」と「満洲文学」との懸隔は、早くから指摘されてきた。尾崎秀樹は「開拓文学」に対して満洲居住の日系作家はかなり冷淡だった。拓務省あたりの派遣で渡満することからして反撥をまねいたらしく、一部の作家を除けば両者の交流はそれほどしつくりといつてはなかったようだ。（中略）いわゆる開拓文学は満洲文学のな

かからは育たなかった」『近代文学の傷痕―旧植民地文学論』岩波書店、一九九一年」と述べた。<sup>9)</sup>人脈や具体的活動において接点をもたなかったとされる「開拓文学」と「満洲文学」の担い手たちは、しかし満洲を「日本の生命線」として郷土化する理念を共有する限りにおいて、同じように「帝国から派遣された者」(江原鉄平「満洲文学と満洲生れのこと」)であった。

むしろそこで顕在化したものとも深刻な溝は、等しく満洲を郷土・故郷として理想化することができた「開拓文学」や「満洲文学」の書き手たちと、「満洲にゐて満洲知らず日本人にして日本知らず」(秋原勝二「故郷喪失」)と自らを位置づける二世作家との間に横たわっている。江原鉄平が「満洲の都会に育った第二国民」の「植民文学」と「佳木斯辺の移民地」の「帝国主义文学」を、同じ穴の貉と弾劾しつつも二分していることには、「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」の対比が作用しているだろう。西村真一郎が「日本内地及び満洲国との間に生れた私生児乃至は庶子のやうなもの」と述べた「大連イデオロギー」を反転させ、江原は「継子の文学」という自覚とともに「満洲文学」を断罪したのである。

金崎賢はエッセイ「ふるさと」『満洲日日新聞』夕刊、一九三七年九月七日(一二日)において、「大連の空気は実にそれは／＼してゐる。所謂植民地的風景である。植民地といつても定住植民地ならふさと感<sup>マヤ</sup>は起るであらうが、大連の如きは浮浪的植民地ではふるさと感の起りやうがない」と述べた。「満洲

文学」の不可能性として浮かび上がった二世の「故郷喪失」の問題は、その母胎となった大連の都市イメージによって語られることになる。だが、「浮浪的植民地」としての大連は、「満洲国」の文化工作が隠蔽しようとした「満洲文学」の欺瞞を照らし出す条件となっただけではなかった。

同じ時期、大連で「満洲アヴァンガード芸術家クラブ」が結成されている。中心になった三好弘光は大連のシュルレアリスム系画家の団体である五果会(一九三二年結成)や、詩誌『鵲』(一九三四年創刊)に参加した大連在住の画家・詩人である。三好は大連に写真の「前衛運動」が「登場する必然性がある」とする文脈で、次のように述べる(薔薇的条件―写真造型への発足)『フォトタイムス』一九四〇年二月)。

大陸で張作霖が幅を利かしてゐた頃、まだ僕等が少年であつた頃、この大陸の門戸の一であり、ある意味では頭脳であつたところの大連に、日本詩壇の最も新しい前衛詩の運動が芽生へたのである。同人雑誌「亞」を中心に、北川冬彦、安西冬衛、瀧口武士その他の詩人が、所謂日本前衛詩運動の先頭に進んで行つたのである。

一九二〇年代の大連で「前衛詩の運動」を展開した「亞」を自らのルーツに位置づける三好弘光は、「詩や絵画の上では、早くから前衛運動が行はれてゐるこの地では、さういふ新しい

写真を消化するに充分な蓄積的条件があつたのである」と述べた。

「満洲のものは眼ではみても言葉ではないへない。内地のものはその逆で本に書いてあることだけは言葉でいへて、一体それがどんなものか実物はサツパリ御存知ない」（秋原勝二「故郷喪失」）。満洲在住日本人二世に「漂泊者」（秋原勝二「故郷喪失」）、「放浪者」（江原鉄平「満洲文学と満洲生れのこと」という自覚をもたらし「故郷喪失」は、既成の表現形式の破壊や、規範からの逸脱を志向する「前衛運動」の可能性としてもとらえられていた。「故郷喪失」の場所、あるいは「浮浪的植民地」大連は、表現の革新を志す芸術家たちにとって、なおも「蓄積的条件」を備えた「前衛」<sup>アヴァンギャルド</sup>だったのである。

ところで、当然のことではあるが、江原鉄平が「私は満洲第二世のすべての人に故郷喪失の事実を強ひやうとは思はない。満洲を故郷として愛してゐるといふ友もある。また内地の生れ故郷を少しも懐しいと思はない人もある」（「満洲文学と満洲生れのこと」と述べたように、満鉄の満洲郷土化運動や、「満洲国」の「建国文学」としての「満洲文学」の創造に情熱を燃やした満洲在住日本人二世も多かった。「内地」で展開した「故郷喪失」の問題系は、失われた故郷を求めて「古代日本」の回復へ傾倒し、「文芸復興」の潮流を形成した。だが、「満洲文学」を創造することは、満洲に独自の日本人の故郷を建設し、同時に失われるべき故郷を希求する欲望自体をも作り出さなければならな

かった。その困難な営みはどのように展開したのだろうか。

#### 四 満洲郷土化運動と〈満洲歳時記〉

城小確は「満洲国の建国精神を文学に受け入れなければならぬ。（中略）我々の墳墓の地となるべき、我々の子孫に残して行くべきこの満洲国をよりよき理想郷を建設しなければならぬのである。郷土愛、つまり郷土愛そのものが五族を同一方向に転ずる唯一の道である」（「満洲文学の精神」と述べた。日本の郷土研究は、地方の風俗文化を調査することで、国民国家の始源<sup>ルーツ</sup>の姿を発見しようとしたが、「満洲国」では、「五族を同一方向に転ずる唯一の道」として「郷土」が模索された。当然、その関心は諸民族<sup>(10)</sup>の風俗文化に分け入っていくことになる。満鉄の満洲郷土化運動は「吾等の生活様式の参考に資すべく満洲土俗の研究資料を蒐めたる各地の土俗博物館と総合研究所」（「満洲を『住みよきところ』に」の設立を目標のひとつに掲げ、各地の風俗文化の調査を行っている。

広範囲にわたる調査と蒐集の前提となつたのは鉄道網の拡大である。すでに一九三三年に「満洲国国有鉄道経営及び建設委託契約」、一九三五年に「北鉄譲渡協定」が締結され、新京以北の北滿鉄路と国有鉄道の経営が満鉄に委託されていた。満鉄の郷土化運動の文化面を担ったのは、旅客課や弘報課に勤めた文化人や芸術家だった。彼らは各地の風俗文化の調査成果を、

社員会の機関誌だけではなく、観光案内や旅行雑誌に発表した。これらの雑誌は満洲に暮らす日本人を、鉄道を利用した旅行や行楽に誘い、土地の歴史や風俗文化への関心を高めるメディアでもあった。

例えば、「奉天」（現・瀋陽）の満鉄鉄道総局旅客課に設置されていた満洲観光聯盟の機関誌『満洲観光聯盟報』には、満鉄沿線各地の風俗文化の調査をもとに、満洲の歴史・風物・年中行事などを、歳時記を模して発行時期に即して解説した、金丸精哉『満洲歳時記』（一九四一年一月～一九四二年一月）が連載されている。金丸精哉は満鉄の弘報課に勤めた俳人で『満洲グラフィ』の編集も手がけた。『満洲グラフィ』は、満洲郷土芸術協会を結成して『満洲短歌』を創刊した八木沼丈夫が、写真家の淵上白陽を招聘して編集にあたらせた。満鉄と「満洲国」のプロパガンダとして名高い同誌は、最先端の写真技術やタイポグラフィ、フォトモンタージュなどの技法を駆使して、「満洲国」の都市造成や鉄道新設の進展、満鉄沿線各地の名所や風物、諸民族の風俗文化などの写真を掲載した。キャプションには日本語と英語が併記され、対外宣伝誌としても意識されていた。<sup>(1)</sup>

単行本にまとめられた金丸精哉『満洲雑暦』（満洲日日新聞社出版部、一九三九年）<sup>(12)</sup>や『満洲歳時記』（博文館、一九四三年）の装丁や装画を手がけた甲斐巳八郎は、やはり満鉄弘報課に勤め、一九三四年から『協和』に「郷土画譜」<sup>(13)</sup>を連載した画家だった。甲斐は郷土玩具収集家の須知善一や詩人の古川賢一郎らと

満洲郷土色研究会や、搬不倒集團<sup>(14)</sup>を結成して、民俗芸能の調査や展覧会なども行っている。これらの活動は、『協和』はもちろんのこと、『満洲グラフィ』でも取り上げられた。満鉄の郷土化運動は、社員の永住促進という枠組みを越えて、さまざまな芸術ジャンルを総動員しながら、「満洲国」の建国宣伝に合流していった。

このような潮流のなか、八木沼丈夫の『満洲短歌』や金丸精哉の『満洲歳時記』をはじめ、土地の季候や風物と密接に結びつく短歌や俳句が、満洲の郷土化により敏感に反応したのは当然のことではあった。『満洲文芸年鑑』第二輯に掲載された甲斐水棹による和歌の概説をみると、『満洲短歌』を含む主要な歌誌が、それぞれ満洲の風土に即した短歌を目指していたことがわかる。また、一九三八年の俳句の状況を概説した、金子麒麟草『満洲俳壇展望』（満洲文話会編『満洲文芸年鑑』第三輯、満洲文話会、一九三九年）では、「満洲の自然」「満洲の風物」「満洲の感銘」といった「満洲俳句の特殊性」<sup>(15)</sup>に「郷土味」を基準に俳句を分類し、「満洲の郷土に深き根底を有すると認められた各派の作品」として、とくに「郷土色豊かなもの」が選出されている。麒麟草の「満洲俳句」の指針は以下のとおりである。

- (1) 形式として広義の十七字音（定形律）を肯定する。
- (2) 内容としての自然感（中略）を欲求する。
- (3) 本質として宇宙自然の原理大道をさながらに実現し

てゐる日本肇国の精神に胚胎することを念願する。

- (4) 特殊性として前記三項を基調として満洲の人情、風俗、土地、氣候の眞実を表現することを理念とする。

金子麒麟草は「満洲の自然により影響せらるゝ感情」や「満洲の風物」を、「日本人の伝統的本然の精神」を盛り込む器としての「定形律」に流し込むことで、満洲に「郷土味」を付与しようとする。定形を固持することで「日本肇国の精神に胚胎する」ことを期した麒麟草の「満洲俳句」は、やはり文語定型という日本の伝統的な文学形式の枠組みに、満洲らしい素材を代入することで「母国の生命線」である満洲の文学を体現しようとした『満洲短歌』の試みと同一線上にあった。

そこでは、あくまでも「満洲の独自性」は日本を標準とする「特殊性」としてのみ処理され、日本の文学形式と満洲の風土との距離は問題視されなかった。表現が安定した形式に準拠して風土を取り込み、かつその表現によつて風土が喚起されるという幸福な円環が揺らぐことはなかったのである。例えば、表現と風土との対応関係をめぐる「満洲にゐても満洲特々の取材によつて色づけらるゝ外は日本歳時記の季感によつて詠ひ得らるゝもので何等満洲カラーを出すことも出来ぬ」（高山峻峰『俳句研究』一九三九年四月）という齟齬の解消を、金子麒麟草は「満洲出生の第二世の時に於て完成して戴ければいい」と断言する。だが、秋原勝二が「故郷喪失」において、「満洲のものは眼

ではみても言葉ではない。内地のものはその逆で本に書いてあることだけは言葉でいへて、一体それがどんなものか、実物はサツパリ御存知ない。（中略）樹の名、魚の名、そして小さな周囲のいろへなものの名、自然の移り変はり、実物と名前がいつも頭の中でゴチャ／＼になる（それに日本語は、満洲の現実に、これまた必ずしも密着してゐない）」と述べたように、「第二世」にとつて、そこは風土と言葉の対応関係に亀裂が走る場所だった。金子麒麟草のいう「満洲の自然により影響せらるゝ感情」を表現に定着させるためには、まず「満洲の自然」に対応する文学形式と、「自然観」を喚起する主題の体系化が必要だった。

その試みの一端を金丸精哉の一連の仕事にみることができるだろう。金丸は「日本肇国の精神」に準じる「特殊性」ではなく、「満洲国」を自立した文化の郷土として発見し、再構成しようとする。その活動を貫いているのは、満洲の風土を体系化することで、新しい文化の基盤となる「満洲国」の「国土」を形象化しようとする欲望である。

金丸精哉『満洲雑暦』には、「満洲国祝祭日」「満洲国民間重要節日記念日表」と「思ひ出の歴史」と題された一年三六五日の年表が収録されている。また、『満洲歳時記』には、満洲の四季の分類を試みた「満洲の季について」や「奉天附近に於ける植物の開花期」、慶祝日や節気表などをまとめた「満洲国時憲書抄」が収録された。さらに、満洲各地二四箇所の観

測地別に、平均気温・最高極気温・最低極気温・降水量・降水日数・快晴日数・霜雪期節などの気象情報が示され、節氣に従って各地の日出入時刻及び方位表まで網羅された。上記の観測地は北緯・東経・標高がそれぞれ記されている。

気象観測には標準時に基づく同時観測が必要とされるが、これには「満洲国標準時」<sup>16</sup>が使用され、節氣下の日出入時刻は「国都」新京が標準とされた。観測地の配置と標準地・標準時の設定は、国都に収斂される統一的な時空間としての国土を構成する。観測記録に基づくことで客観性を装った国土表象は、『満洲歳時記』に収録された「普通穀類耕作順序」のような農事暦や、「慶祝日」「満洲国民間重要節日記念日表」といった曆象に連ねられることで体系化され、「満洲国」という新たな郷土のかたちに成形された。この膨大なデータが「満洲国」の文化の枠組みとして提供されていることは言うまでもない。

## 五 〈満洲歳時記〉の錯時性<sup>アノクロニ</sup>

金丸精哉の目的は、測量と観測に基づいた国土認識の延長線上で、満洲の風土に即した風俗文化を、歳時記の形式を模して日本語で紹介し、満洲の風土と日本語・日本文学を結び付けることにあった。したがって、本文篇は、単なる事項の羅列に止まらず、日本との関わりにおいて満洲の歴史と風土が結び付けられ、満洲で暮らす日本人の感受性を刺激するよう企図されて

いる。例えば、満洲の年中行事「かまど祭」の記述から始まる『満洲雑暦』の二月の記述は、「日露開戦」「独立宣言」と続けられ、日露戦争や満洲事変の進展、「満洲国」の帝政移行があった二月という月を、「実に二月は、満洲にとつて、新生命を生み出す胎動の月とも言ふことができる。目のとどろかぎり氷雪に蔽はれた大地も、裸身の木々も、やがてめぐり来る春のために精一ぱいの力を秘めながら、黙々と隠忍の日を送つてゐる姿は、この上もなく尊いと思ふ」と意味付ける。

金丸精哉は『満洲雑暦』の序文で「筆者が本書執筆の念願を起したのは、要するに歳時記に偶して満洲独自の詩源を季節の序に従つて開発し、一は以て満洲に対する世人の理解と親愛の情を深め、一は以て満洲を対象として詩歌俳諧を試みんとする風雅の士に詩材を提供せんとするに他ならない」と述べた。『満洲雑暦』は「あふれ出る詩魂」（北野堺「饒かな風物」『満洲日日新聞』一九四〇年一月一二日）、「诗情豊か」（村岡勇「新刊紹介」『満洲日日新聞』同（五日））と評されたが、その熱意は満洲の風土をめぐる多様な知識を詩材として集成するだけではなく、「満洲独自の詩源を季節の序に従つて開発」することに傾けられた。満洲の歴史を自然と関連させながら、日本語によつて诗情<sup>ポエジ</sup>を喚起すること。それは、満洲の四季に接し、歴史を想起しながら、満洲在住の日本人が何を思うべきかを網羅した感受性の手引きでもあった。『満洲雑暦』の序文には次のようにも記される。

大正初年に大連の小学校・中学校で共に学んだわれわれの学友の中で、現在両親揃って健在なものは極めて少い。そして多くは満洲の現地で亡父の遺業を継ぎ或は親の勤めた会社で働いてゐる者もある。つまり、われわれは文字通り二世になつてゐるわけである。かうして見ると、満洲はもはやわれわれには切つても切れぬ郷土でなければならない。

しかし、この試みは明らかな混乱を呼び寄せることになつた。『満洲雑暦』に収録された年表は、一年三六五日を月別日付順に並べ、その日に起きた歴史的事件が記述されている。表の最上段が日にち、その下に年、出来事の順に構成されており、日が年よりも上位項目にあるために、年表の時間は直線的ではなく、場合によっては大幅に前後する。歳時記の原理は、線状に流れる時間を毎年反復する時間の中に収めることで歴史的な時間を解体し、循環する時間＝季節を創出することだが、『満洲雑暦』は偶然近しい日付を分有している出来事の相似性を必然性に転化することで季節を作り出し、そこに意味を与えようとする。

例えば、二月五日、満洲事変における関東軍の哈爾濱入城（一九三二年）、一〇日、日露開戦（一九〇四年）、一八日、東北行政委員会の成立（一九三二年）、二三日「満洲国」の年号決定（一九三四年）、二四日、旅順進撃（一九〇四年）といった出来事は、

一	昭和 二二	奉天―北京間直通列車を一日二回に増發、同時にスピードアップを實現
二	昭和 二二	滿鐵の遼東島築港計畫、大擴張と決定
三	昭和 九	滿洲國民生部では、保甲法遵守に關する訓令を發す
四	昭和 一〇	トルコタール極東民族大會、奉天に於て開催さる
五	昭和 七	多門中將の率ゐる第二師團、哈爾濱に入城す
六	昭和 五	國民政府は遼東島築港契約を認可
七	明治 二八	山崎、鐘崎、藤崎三烈士の遺骸、金州西門外で發見さる
八	昭和 八	滿洲國政府では、滿鐵に對する新線建設と國有線の委託經營方針を決定
九	昭和 二	滿洲輸入組合見本市の北支進出決定す
一〇	明治 三七	露國に對し宣戰詔勅下る
一一	明治 三七	露國水雷敷設艦エニセイ號、大連灣口で作業中爆沈す
一二	明治 三八	永沼拒捕騎兵隊、范家屯の新開河鐵橋を爆破す
一三	明治 四一	大連、遼陽間の廣軌改築工事成り、廣軌列車の試運転行はる
一四	昭和 四	關東州境塔寺屯に匪害取締のため出張中の安住大連法院長、匪彈に殉職
一五	大正 六	東支鐵道との交渉のため、哈爾濱に滿鐵公所設置さる
一六	明治 二八	皇軍、海城に逆襲の清兵を撃退す
一七	明治 四五	革命軍、鐵嶺に民國新政廳を開き、三日にして潰ゆ
一八	昭和 七	東北行政委員會の組織成立し、新國家三大使命に關する獨立宣言文發表
一九	昭和 八	滿鐵では奉天中學校（現奉天一中）設置の件を決定
二〇	昭和 七	滿洲建國の促進民衆運動、奉天を皮切りに各地に行る
二一	明治 三七	東清鐵道爆破の我が特別任務班新川、沖一行十二名、北京を出發す
二二	明治 三八	我が鴨綠江軍、清河城に進撃、奉天大會戰の火蓋を切る
二三	昭和 九	滿洲新帝國、年號を康徳と決定、三月一日より實施を見る
二四	明治 三七	第一回旅順口閉塞決死隊、壯途に就く
二五	昭和 七	滿洲國の國號、元首、國旗、年號、首都を發表
二六	大正 五	奉天で耐寒飛行の我が陸軍機モ式十六號、大連より旅順間を飛ぶ
二七	昭和 七	三月一日より開業の滿洲中央銀行に關し、政府聲明を發す
二八	昭和 八	熱河方面に進撃の服部旅團、支那軍を撃破、沙桓山を占領

金丸精哉「思ひ出の歴史」（『満洲雑暦』満洲日日新聞社出版部、1939年）より2月の表を抜粋。

年代や歴史的文脈とは無関係に、連続する日付という共通点のみを基準に選択され、配列された出来事の相似性から「新生命を生みだす胎動の月」という二月の意味が抽出される。この奇妙な年表の目的は、直線的に進行する歴史的時間を、循環する季節に再構成して暦を創り出し、暦に対応した折々の詩情や感受性の基盤を、日本人の精神風土に定着させることであつたはずだ。

しかし、この暦からは出来事の因果関係を辿る歴史的時間も、毎年おとずれることで風土を固定し、感受性を強化する、安定した季節の循環も見出すことはできない。歴史的秩序にしたがつて線上に進む時間は進行（退行）と同時に絶えず解体され、過去に引き戻され、あるいは未来へ飛躍する。しかも、一回的な出来事の偶然的な抽出を基準とするため、ここで演出された循環する時間を再現することはできない。この年表では過去・現在・未来を錯綜する時間として示すという混乱があり、作り手の意図しない時間の乱調が起こっているのだ。この暦によって導き出される時空間は、日本でないのもちろんだが、「満洲国」でもなかった。

一九四〇年二月一日、『協和』は「満洲定着特輯」を組んだ。巻頭言「我等満洲に永住せむ」には次のようにある。

嘗て後藤新平、児玉源太郎の二先達は、満洲に五十万人の日本人の移住を以て、大陸開発の礎となさんとせり。以来

春風秋雨、日本人の満洲永住を試みんとせば、内に老後の家計に苦しみ、出でては虎狼の如き緑林の秕政に却けられ終りぬ。また大連農事会社が関東州内に於ける移住を企てしも及ばず、更に又社員会が満洲郷土化運動を試みて続かざりしも、昨夏再び満鉄人の満洲永住を促さんとして拓殖運動の形となりて再現す、また機を得たりとせんか。

この巻頭言は日露戦争で総参謀長として指揮をとり、満鉄設立委員会の長を務めた児玉源太郎と、満鉄初代総裁の後藤新平の植民地経営から、満鉄社員会の郷土化運動、満鉄拓殖委員会の拓殖運動までをひとつらなりの発展の歴史として記述する。満洲を郷土化することで、日本の国土に再編成する植民地主義的な欲望の発露は、「満洲国建国」を分水嶺に、満洲を日本から自立した独自の故郷として意味付ける営みへ転回した。

満洲郷土化運動や「満洲文学」の創造といった試みは、いずれにしても、日本語・日本文学の枠組みを特権的に満洲の風土に適用したことに変わりはない。それは結局のところ、日本の文学形式に、満洲らしい素材を代入することで独自性を主張した、文学による風土の植民地的収奪に過ぎなかったのかもしれない。それは、日本語・日本文学、あるいは日本人に連繋のない風土、つまり異郷に故郷を作りだす運動だった。金丸精哉の文学的営為もまた、満洲に独自の風土を発見し、季節の循環として安定させることで、その歴史の強化に寄与する試みだった。

た。だが、金丸精哉の年表は、偶然性から選択された断片が恣意的にコラージュされたものとして提示される。むしろそこでは出来事の因果関係によって線上に推移する歴史的時間は解体の危機に瀕している。

近年、「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」について、「当時大連市で発行されていた文芸同人誌『作文』と、新京創刊の『満洲浪漫』が対比され「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」として比較されるようになった」（守屋貴嗣『満洲詩生成伝』）と指摘される一方で、「明確な思潮を表徴するに至っていたとは思えない」（葉山英之『満洲文学論 断章』三交社、二〇一一年）というように、明確なイデオロギーの差異や、人脈上の対立は認められないとも言われてきた。また、「現実生活に密着した、あるいはみずからの感性に忠実な文学を追求する姿勢」を「大連イデオロギー」と措定し、新京の「政治主義」に対抗する「文学主義」と捉える見解も示されている（岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、二〇〇〇年）。

「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」は、「満洲国建国」後の地政学的文脈において顕在化し、満洲在住日本人二世の「故郷喪失」の問題が浮上すると、喪失を積極的な条件とするアヴァンギャルドと、故郷を創造しようとする「満洲文学」の対立として再演された。しかし、それは単なる文芸思潮の対立ではなく、政治的な文脈が交差する問題系でもあった。『満洲雑暦』や『満洲歳時記』などの金丸精哉の仕事は、新京を国

都とする「満洲国」に日本人・日本語・日本文学の新しい郷土・故郷を作り出す「満洲文学」の延長線上でなされた。だが、その意図に反して、満洲の風土と日本文学を架橋することの不可能性と、満洲を日本人の故郷に変える営みの前衛性は、〈満洲歳時記〉にも構造化されていたのである。

## 注

(1) 八木沼丈夫と満洲郷土化運動の関わりについては、拙稿「満洲郷土化運動と〈日本文学〉——短歌・俳句・歳時記——」（『東洋通信』二〇一三年十二月）に詳しく述べた。

(2) 守屋貴嗣は、『亞』の創刊同人で終刊後に『満洲短歌』に参加した城所英一と富田充が、文語定型の短歌を志向したことについて、「中央中心主義による内地に対するコンプレックス、西欧至上主義に対する反発、植民地主義による「満洲」に対する日本人としての優位性、「日本の生命線」たる満洲居住者であることの優越感といった、満洲在住者の様々に屈折した心性があった」（『満洲詩生成伝』翰林書房、二〇一二年）と指摘している。

(3) 『亞』以降の満洲における日本語詩の展開については、拙稿「まなざしの地政学——大連のシュルレアリスムと満洲アヴァンギャルド芸術家クラブ——」（『アジア遊学』二〇一三年八月）に詳しく述べた。

(4) 「福祉増進と満洲郷土化運動」（『協和』一九三三年一〇月一日）には次のようにある。「磐石の安定を見たる満洲国は吾等にとつても亦楽土に相違ない。吾等は安んじて満洲に根を下すべきである。定住せんがためには満洲を郷土化するの要がある。所謂生命線を実質的に表現すべく、此地に生命を託すべく努力邁進すべき

である。

- (5) 「満洲郷土化に満鉄社員会の運動」(『満洲日日新聞』一九三七年二月二五日)は、「満鉄社員会では昨年末評議委員会で社員及びその子弟を第二の故郷たる満洲に永住せしめる具体案を樹立することになり調査部によつて研究中であつたがこの程具体案が出来上つたので近く正式に役員会に上程して承認を得た上、満洲在住者の郷土化運動と銘打つて積極的に乗出すことになつた」と報じている。詳しい経緯は「満洲郷土化運動と(日本文学)」(前掲)に述べた。

- (6) 西村将洋「満洲文学」からアヴァンギャルドへ―「満洲」在住の日本人と言語表現」(『外地』日本語文学論)世界思想社、二〇〇七年)は、一九三七年に「満洲文学」に関する議論が活発化する過程で「内地」との上下関係を切断しようとする、ポスト植民地の意識」が強調されたことを指摘している。

- (7) 日本と満洲における「故郷喪失」の問題については、拙稿「満洲」における故郷喪失―秋原勝二「夜の話」(『日本文学文化』二〇一一年二月)および「まなざしの地政学」(前掲)に詳しく述べた。

- (8) 西村将洋「満洲文学」からアヴァンギャルドへ(前掲)は、秋原勝二「夜の話」における差延機能を「満洲」在住の日本人の表象」として分析し、「満洲文学」論は台頭と同時に骨格を脱臼していたと指摘している。また、江原鉄平の「満洲文学と満洲生れのこと」を取り上げ、「満洲文学」は在満邦人の感情を排除することでは成立しない、その点を無視する以上、「満洲文学」(中略)は、必然的に権威的な日本人による「帝国主義文学」や「植民地文学」にならざるをえないと断言したのである」と述べた。

- (9) 西原和海「満洲文学研究の問題点」(『昭和文学研究』一九九二年九月)も「内地作家の、いわゆる『開拓文学』は、満洲文学の

動向とはほとんど関わりを持つことがなかった」と指摘している。

- (10) 「満洲国」の民族構成は、「満洲国建国宣言」に記された「原有の漢族、満族、蒙族及び日本、朝鮮各族」の他、「満洲新国家には漢、満、蒙、日、鮮、露の六民族が居住することになる」(佐々木一雄『将来の満洲国』兵林館、一九三二年)というように、ロシア革命後に満洲に亡命した白系ロシア人をはじめ、ツングース系、モンゴル系の先住少数民族が加えられた。

- (11) 竹葉文「異郷のモダニズム―満洲グラフ」と写真画集『光る丘』(『彷彿月刊』一九九四年六月)、長野重一・飯沢耕太郎・木下直之編『淵上白陽と満洲写真作家協会』(岩波書店、一九九八年一〇月)によれば、八木沼丈夫と淵上白陽は「満洲国建国」に際して、新政府の官吏として資政局弘法処に所属し、建国宣伝に従事した。西原和海「満洲における弘報メディア―満鉄弘報課と満洲グラフのことなど」(『國文學』二〇〇六年五月)によると、このとき金丸精哉も参加している。

- (12) 『満洲日日新聞』夕刊の学芸欄に、一九三九年一月から九月にかけて毎月三回ずつ連載された「満洲雑暦」に、一〇月から一月分が書き下ろしで加えられた。

- (13) 図録『甲斐巳八郎展』(福岡市美術館、一九八二年)では「満洲郷土画譜」の連載は一九三三年からとされており、『協和』誌上に同趣旨の記事が確認できるが、目次上に「郷土画譜」(満洲郷土画譜)と記されたのは、一九三四年二月一五日発行号以降であるため、本稿ではこれに従った。

- (14) 会員は赤羽末吉・古川賢一郎・福富壽生・市丸久・甲斐巳八郎・国井真・中島荒登・須知善一・内田俊治・山越音(須知善一編『苦力素描』満洲郷土色研究会、一九三七年)。

- (15) 搬不倒は日本の起き上がり小法師に似た粘土製の人形。コレクターの須知善一を筆頭に、満洲郷土色研究会のメンバーは『満洲

土俗人形』(満洲郷土色研究会、一九四〇年)に調査研究の成果をまとめている。

(16) 貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア―ポスター・絵はがき・切手』(吉川弘文館、二〇一〇年)によれば、一九三七年「一徳一心」をスローガンとする日満一体化の名の下に、日本と「満洲国」の一時間の時差が解消され、同一の標準時が適用されることとなった。これを機に「満洲国」の鉄道・船舶・航空機のダイヤが全面改正されている。

## 付記

本稿は二〇一三年輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム「文化における異郷」(二〇一三年一月一六日、台北)での口頭発表をもとに執筆したものである。会場内外で貴重な意見を賜ったことを記して感謝申し上げたい。なお、本稿は平成二五年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。